



2016年10月15日発行（季刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2016年10月
第108号

漢 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

漢点字の散歩（45）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（101）（山内 薫）	11
東京漢点字例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	18
漢文のページ	23
ご報告とご案内	25
編集後記（木下和久）	27

漢点字の散歩（四十五）

岡田 健嗣

「常体表記」と「詩体表記」、再考

前号・前々号に引き続き今回も、漢点字版が完成しました『萬葉集釋注』第四卷（伊藤博著、集英社文庫）（萬葉集巻第七・巻第八収録）から、「非略体表記」と「略体表記」の、柿本人麻呂の歌について触れさせていただけようと思います。

と申しますのも、「萬葉集」に関して私の持つておりました知識あるいは先入見が、この巻の人麻呂歌によって御破算になってしまったからに他なりません。驚きの連続でした。

前号ではその驚きの覚めやらぬままに脱稿したために、その認識も論旨も混乱し、足下がおぼつかない状態になってしまいました。その辺りを少し整理してみたいと思います。

「萬葉集」の表記法をどのように考えていたかとい

う、私の当初の認識を申し上げますと、「萬葉集」は「萬葉仮名」と呼ばれる原書の仮名文字で表記されていて、現在使用されている仮名文字は、この「萬葉仮名」を源としている、というものでした。そして「萬葉仮名」は、中国に発した漢字を取り入れて、その字音を日本語の音に当てて使用したもので、「安（あ）、以（い）、宇（う）、衣（え）、於（お）」（広辞苑より）のように、現在の仮名文字の最初期に位置づけられる文字であるというものでした。勿論このような認識が、間違いだと言うものではありません。

「萬葉仮名」と呼ばれる、漢字を仮名文字として用いる表記法は、確かに存在しましたし、その多くは、字音を日本語の音に当てることで仮名文字として機能するように使用されておりますので、この認識は大いに事宜に叶ったものと言えます。ところが私が初めて『萬葉集釋注』の漢点字版に触れてみますと、この万葉仮名は、現在の仮名文字に置き換えられるようなものではないことが、即座に分かったのです。勿論このことは、「萬葉集」に少しでも触れた経験のある方

には、常識であるに違いありません。なぜならば、私自身が万葉集に触れた途端に、右のような知識・概念は通用しないことを、まず知ったからに他なりません。「万葉集」は漢字音を日本語の音に当てて日本語を表記する文字として使用された歌集とばかりは言えない、そうではなく、日本語を表記する文字がないころ、如何に日本語を表記しようとしたかを、跡づけた歌集と位置づけられるということ、誠に当然のことを、目から鱗が落ちるような気持ちとともに知ったのでした。

そこで今回も、読者諸兄姉のお許しをいただいて、人麻呂歌の「非略体表記」と「略体表記」の歌を、もう一度引用させていただきなながら、考えを進めてみたいと思います。

今回は、前・前々回掲げました「非略体表記」の歌四首、「略体表記」の歌四首全てを、音仮名・訓仮名・訓読・読み下しに分けてみたいと思います。

注 (音) 音仮名、(訓) 訓仮名、(訓読) 漢字の

訓読、(読み下し) 漢文読み下し体

【非略体表記の人麻呂歌】

一〇九五

三諸就 三輪山見者 隠口乃 始瀬之檜原 所念
鴨

みもろつく 三輪山見れば こもりくの 泊瀬
の檜原 思ほゆるかも
みもろつく みわやまみれば こもりくの は
つせのひはら おもほゆるかも

三諸就 (訓読) 三輪山 (訓読) 見 (訓読) 者
(訓) 隠口 (訓読) 乃 (訓) 始 (音) 瀬之
(訓) 檜原 (訓読) 所念 (読み下し) 鴨 (訓)

一〇九六

昔者之 事波不知乎 我見而毛 久成奴 天之香
具山

いにしへの ことは知らぬを 我れ見ても 久

しくなりぬ 天の香具山

いにしへの ことはしらぬを われみても ひ

さしくなりぬ あめのかぐやま

読)之(訓)名(訓)尔(音)有(訓読)之(音)

一〇九八

木道尔社 妹山在云 玉櫛上 二上山母 妹許曾

有来

昔者(訓読)之(訓) 事波(訓) 不知乎(読み下し) 我見(訓読) 而(読み下し) 毛(音)

久成(訓読) 奴(音) 天之香具山(訓読)

紀伊道にこそ 妹山ありといへ 玉櫛笥 二上

山も 妹こそありけれ

さぢにこそ いもやまありといへ たまくしげ

ふたかみやまも いもこそありけれ

一〇九七

吾勢子乎 乞許世山登 人者雖云 君毛不来益

山之名尔有之

我が背子を こち巨勢山と 人は言へど 君も

来まさず 山の名にあらし

わがせこそ こちこせやまと ひとはいへど き

みもきまさず やまのなにあらし

木道(訓・訓読) 尔(音) 社(訓) 妹山在云(訓

読) 玉櫛(訓読) 上(訓) 二上山(訓読) 母(音)

妹(訓読) 許曾(音) 有(訓読) 来(訓)

【略体表記の人麻呂歌】

一二四七

吾勢子(訓読) 乎(音) 乞許世(音) 山(訓読) 登(音) 人者(訓読) 雖云(読み下し)

君(訓読) 毛(音) 不来益(読み下し) 山(訓

大穴道 少御神 作 妹勢能山 見吉

大汝 少御神の 作らしし 妹背の山を 見らく

しよしも

大穴道（おほなむち） 少御神（すくなみかみ
の） 作（つくらしし） 妹勢能山（いもせのや
まを） 見吉（みらくしよしも）

一二四八

吾妹子 見偲 奥藻 花開在 我告与
我妹子と 見つつ偲はむ 沖つ藻の 花咲きたら
ば 我れに告げこそ

吾妹子（わぎもこと） 見偲（みつつしのは
む） 奥藻（おきつもの） 花開在（はなさきた
らば） 我告与（われにつげこそ）

一二四九

君為 浮沼池 菱採 我染袖 沾在哉
君がため 浮沼の池の 菱摘むと 我が染めし
袖 濡れにけるかも

君為（きみがため） 浮沼池（うきぬのいけ
の） 菱採（ひしつむと） 我染袖（わがそめし
そで） 沾在哉（ぬれにけるかも）

妹為 菅實採 行吾 山路惑 此日暮
妹がため 菅の実摘みに 行きし我れ 山道に惑
ひ この日暮しつ

妹為（いもがため） 菅實採（すがのみつみ
に） 行吾（ゆきしわれ） 山路惑（やまぢにま
とひ） 此日暮（このひくらしつ）

以上、文字の使用を「音仮名」「訓仮名」「訓読」「読み下し」に分けてみました。が、「訓読」と「読み下し」とを、あまり分明に分けることができず、下した。このような分け方がこの歌の文字遣いに叶ったものであるかも、極めておぼつかないところではあります。が、しかしこのように「非略体表記」の歌と「略

体表記」の歌を並べてみますと、人麻呂が何を目指していたかが、臆気に分かるように思えて参ります。

「略体表記」の歌は「非略体表記」の歌に比して、大変すつきりした感を与えます。これら四首の歌は、返り点を必要としないままに読み下すことのできる漢文のような、中国の臭いのしない漢詩のような、現在の文字で助詞や送りがないを付けてみれば、そのまま現代文としても通用するような、そういう構造を持つているように見えます。

しかし「万葉集」は、「記・紀」と並んでわが国最古の文献です。これ以前には文章と言えるものはありませんでした。その意味からすると、「万葉集」の文章も、わが国の言語を表記するものとして、その文字遣いは極めて原初的であるとして、当然表された文章も原初的であろうという、誠に勝手な先入見に依拠した理解に基づいて読み進めますと、誤った方向へと進んで行きかねないように思われます。むしろここではつきりさせて置かなければいけないことは、「記・紀」にしる「万葉集」にしる、文字表記が原初的であ

ることから文章も原初的、言い換えれば未熟なものであるという理解に陥らないことが肝要だということではないか、恐らく当時のわが国の人々は、中国の文献をわが国の言語で、わが国の文字で表記されたものとして読みこなそうとして、またその成果を、わが国の言語で表す文章に活かそうとしたのが、この「万葉集」であり「記・紀」であるということに帰着するようには思われます。その意味で、高度な文章能力が養われて、なお実践と実験が試みられているのが、これらの文献と言えるのではないか、そう思われてなりません。

「万葉集」で用いられている文字を、つい先頃まで私は、漢字音を一字一音として、わが国の言語の音に当てて使用したものと理解してきました。ところが右の「非略体表記」の歌をご覧いただいてお分かりのように、そのような文字遣いは、極めて限られていません。多くは訓読、その次に訓仮名、それで足りないところを埋めるように、音仮名が用いられているように見えます。

もう一度見てみましょう。

一〇九五 「三諸就(みもろつく)」、地名であった、「三(み)諸(もろ)」も訓読、「就(つく)」も訓読。「三輪山(みわやま)」、地名、各文字訓読。「見者(みれば)」、訓読と訓仮名。「隱口乃(こもりくの)」、地名、訓読と音仮名。「始瀬之檜原(はつせのひのはら)」、地名、訓仮名・訓読。「所念鴨(おもほゆるかも)」、読み下し訓読と訓仮名。

「三諸(みもろ)」、「三輪山(みわやま)」、「隱口(こもりく)」、「始瀬之檜原(はつせのひのはら)」は全て地名です。この地名には、「隱口」の「口」が音仮名で、それ以外は訓仮名が当てられています。多少の文字遣いの異動はあっても、このまま地名の固有名詞として使用されることになったはずです。

「見者(みれば)」と「所念鴨(おもほゆるか

も)」は、漢文の読み下しと訓仮名を交えた表記となっているようです。この歌では、一部の例外の他は、訓読と訓仮名によって表されていると言えるようです。

一〇九六 「昔者之(いにしへの)」、訓読と訓仮名。「事波不知乎(ことはしらぬを)」、「事」は訓読、「波」は音仮名、「不知」は読み下し、「乎」は音仮名。「我見而毛(われみても)」、「我見」は訓読、「而」は読み下し、「毛」は音仮名。「久成奴(ひさしくなりぬ)」、「久成」は訓読、「奴」は音仮名。「天之香具山(あまのかぐやま)」、「天之」は訓読、「香具山」は音仮名と訓読。

この歌では地名は「天之香具山」一つです。大和三山の一つである天に通じる聖山である香具山を讃えた歌です。ここでも主要な文字遣いは訓読で、音仮名は助詞に限られています。

一〇九七 「吾勢子乎（わがせこを）」、「吾勢子」は、「勢」が音仮名ではありますが、既に慣用的な表記となっているようで、つづく「乎」は音仮名。「乞許世山登（こちこせやまと）」、「乞」は訓読、来て欲しい、会いたいの意らしい、「許世山」は音仮名と訓読、「香具山」と同様地名を表して、「登」は音仮名。「人者雖云（ひとはいへど）」、「人」は訓読「者」は音仮名、「雖云」は読み下し。「君毛不来益（きみもきまさず）」、「君」は訓読、「毛」は音仮名、「来不益」は読み下しのようですが、「来」と「益」は訓読と言つてよいかもしれません。「山之名尔有之（やまのなにあらし）」、「山之名」は訓読、「尔」は音仮名、「有」は訓読、「之」は音仮名。この歌でも、「吾勢子」、「許世山」には音仮名も使用されていますが、慣用句、あるいは地名ではこのようなことが多く行われているようで、その他の音仮名は、助詞・助動詞に限られているようです。

一〇九八 「木道尔社（きちにこそ）」、「木道」は「紀伊路」、訓仮名と訓読と見てよいかもしれません。「尔」は音仮名、「社」は訓仮名でしょうか？「妹山在云（いもやまありといへ）」、この句は訓読。「玉櫛上（たまくしげ）」、「玉櫛」は訓読、「上」は訓仮名。「二上山母（ふたがみやまも）」、「二上山」は訓読、「母」は音仮名。「妹許曾有来（いもこそありけれ）」、「妹」は訓読、「許曾」は音仮名、「有」は訓読、「来」は訓仮名。この歌も、前三首と同様、助詞以外には音仮名は用いられておりません。大和人が紀伊路の名所「妹山」を望んで、大和にも同じ名の山があると言い、それにかけて大和に残してきた妻、あるいは恋人を思うという歌のようです。

人麻呂歌の「非略体表記」の歌四首を見て参りましたが、「略体表記」の歌では助詞・助動詞が省略されておりますので、「非略体表記」の歌でさえ音仮名の

使用は極めて限定的ですので、「略体表記」の歌では、万葉歌でありながら、万葉仮名が用いられないという、私の抱いていた常識が、そっくり転倒してしまふような、驚くべき結論が見えて参りました。

勿論人麻呂歌以外では、万葉仮名のみで表された歌も数多くありそうですし、漢詩のような、文字数の少ない歌もあるようです。

万葉が編まれるまでに当時の人々が経験した文章とは、恐らく漢籍だけだったに違いありません。その漢文、あるいは漢詩を読みこなすこと、あるいはそれらを鑑賞することから、わが国の言葉で表現された文章を紡ぎ出すまでに至る時間的、空間的な距離は、想像を絶するものがあります。恐らく数百年という時日を積み重ねて、その最も最後の、最も尖端に位置したのが、柿本人麻呂という人物で、持統朝とそれに続く天武皇統の宮廷の言語文化の開花が見られたのは、人麻呂の功績によるものに違いありません。

その人麻呂が仕上げをするまでの、わが国の人々

の、文字あるいは文章に向かう膨大な時間は、残念ながら記録としては残っていません。恐らく木簡などにはその跡を見ることはできるのでしようが、私どもには推測、あるいは想像することだけが許されています。そこで少しだけ貧弱な想像を巡らせてみたいと思います。

現代に繋がる日本語が、どのようにしてわが国に根付いたかは、謎に包まれています。弥生時代（前十世紀）は、大陸から多くの人々がこの列島に渡って来たと言われます。にもかかわらず言語は中国語に置き換わることなく現在に繋がっています。中国から渡来した人々は、恐らく当初から、中国で普及し始めていた文献を携えていたと思われます。弥生人たちの間で中国語が普及していたとすれば、文字文化はそのまま定着したはずで、しかしなぜかそうはなりません。これも想像に過ぎませんが、何らかのタイムラグがあって、弥生人たちが日本語を使うようになってかなりの時を経て、中国から文献が渡って来た、そう

考えるのでしょうか。

日本語使用者である私たちのご先祖様は、どのよう
にこの文献に向き合ったか。まず中国の政府、中央政
府とは限らず、地方の政府からかもしれないませんが、そ
の通知書に向き合わされたのではないのでしょうか。ど
うしても読まない訳には行かないこのような文書を、
どのようにして読んだか、これはさほど想像に難くあ
りません。幕末に欧米と交わされたいわゆる不平等条
約、これに似たことが、弥生人と大陸の政府の間にも
あったはずです。幕末の事態は、明らかに当方の認識
不足、知識も理解力も及ばない中で結ばれた条約、国
家の概念さえわが国と欧米との間に共有しないまま
に、むしろそれだからこそ結ばれた条約が、当時の通
商条約だったと言われています。それが不平等である
ことに気づいたのは、遙かに後のことだと言われま
す。明治に入った後、政府も民間も、何とかして欧米
の国力と文化に近づきたいと、努力を重ねて現在に至
りました。

同様のことが、弥生時代にもあったとしても不思議
ではありません。当時の先進地域は中国でしたし、最
新の技術と文化が文字でした。文字は、誰かの手解き
を受けなければ、身につけることができません。しか
もその文字を使用する言語とともに学ぶことになりま
す。弥生時代の中期か後期かにわが国にもたらされた
文字文化は、まずは当時の中国語とともに渡って来
て、わが国の人々は、渡来した中国人から中国語とと
もに手解きを受けたはずです。私たちが中学に入って
英語を勉強し始めたころ、どのように習ったかを思い
返しますと、この英語の単語は、この英語の文章は、
日本語に直すところという意味になる、こういう文章に
なると習ったと思います。これは当然のことです、外国
語を学ぶに当たっては、まず生得的に身につけている
言語があつて、学ぶ外国語が、身につけている言葉に
直せば何を言っているのかという順序で学ばなければ、
外国語を学ぶことができないからに他なりません。
弥生の人々も同様にして中国語と中国の文字文化

を取り入れたと考えるとよいでしょう。ただ私たちが英語を習うのとは違って、文字は中国語を表すものしかなかったということですから。そこで当時の人々は、漢字を訓読するという、思いも寄らない方法を編み出ししました。これは漢字が表意文字であることに由来して、文字の意味を日本語に直す何を指すかという方法で叶ったものと思われずし、漢字を訓読するということは、漢文も訓読し得るということに繋がり、それが日本語を漢字で表記する可能性に繋がったと言えるのでしょうか。

そのようにして数百年を経て、人麻呂の時代になります。漢文を日本語に直すこと、数百年をかけて、漢字の訓読（日本語の読み）が完成しました。こうして漢字の読みには漢字音の音読と、日本語の読みの訓読が成立しました。人麻呂は、プライベートにはこれで十分と考えていたのではないのでしょうか。「詩体表記（略体表記）」の歌は、このような表記で表されておりますし、日本語の表記法としても、見事な表記法と言えます。

しかし日本語には、助詞・助動詞・活用語尾というものがありません。これを表すには、漢字の意味はむしろ邪魔になります。しかし当時は文字と言えは漢字しかありません。そこで恐らく音仮名、次いで訓仮名を考案したというのが、一連の時系列ではないか、こう想像してみました。

このようにして「記・紀」と「万葉集」の編纂が待たれる環境が整いました。『古事記』は稗田阿礼の収集した資料、記憶に収められていた資料を、太安麻呂が編集したと言われますし、『萬葉集』は、大伴家持を中心とする人々が資料を収集して編集したものとされます。その資料の中に「人麻呂歌集」と呼ばれる三つの原資料があつて、万葉集の各巻に収められて私たちが鑑賞できるようになったのでした。

このようにして成立した『万葉集』が、漢点字を習得することで、視覚障害者にも鑑賞できる環境が、現在整いつつあるという現実を、多くの皆様にご存じいただいで、多くの視覚障害者に、是非鑑賞していただきたいと願って止みません。

点字から識字までの距離（二〇一）

野馬追文庫（南相馬への支援）（十九）

二〇一四年に届けた本と送り先の変更（下）

山内 薫

翌週にはOさんから再び次のようなメールを頂いた。
た。

「K様 いつも、南相馬市の仮設集会所へ素敵な絵本をお送りいただきありがとうございます。震災から三年以上たち、集会所に配本いただくようになって、もうすぐ三年になります。ずっと、継続して支援していただけることは、被災地にいる人間にとっては、とても勇気になっています。

今回は、保健センターにもアンパンマン折り紙や絵本をお届けいただき、感謝しております。まだ、五歳未満のお子さんの帰還率は三六%くらいにとどまっています。放射線量は当然ながら下がっていますが、それに関する不安を口にすることがタブーにならないよう、かといって、外部から、そんな所に子供を住まわせるなんてかわいそうだ、などと、一方的に言われる不条理さを感じないですむような環境ができるといい、と考えることがあります。まだまだ、先の長い復興ですが、だれもが笑顔で過ごす時間が多くなるように……と願って仕事をしています。」

そして翌月の七月には『スーホの白い馬』（大塚雄三再話、赤羽末吉画、福音館書店）を送った。

Yさんは次のようなメッセージを下された。

「『スーホ』は子ども達にとって本当に良い本を……の信念が伝わる良い絵本だと思います。この本は、幼い時に読んだ記憶が大人になってから様々な体験をしたことよって、やっと本当の意味を理解できる深い本だと思います。幼いうちはすべて理解できないかもしれませんが、このような世界を知って大人になるのとならないのでは、まったく違うと思います。

おととい（七月五日）に福島県主催の読書フォーラ

ムにパネリストとして参加してきました。県内の学校図書館などの子ども読書に関わる場が今、大きく変わる時期に来ていることを肌で感じてきました。ボランティアの方を始め、多くの人が福島の子どものために活動していることを改めて実感し、私も正規の児童図書館員として、より一層頑張らなければと奮起するよいきっかけともなりました。フォーラムでも話をしてきましたが、『良い読書環境は周りの大人によって作られていく』『質の良い読書が、その後の読書人生の基盤になる』という信念を持ち続け、私自身が良い本にたくさん出会って、それを子どもたちに一冊でも伝えていけたらいいなと思います。」

八月は本を送り始めて丁度三年目の節目となり、Kさんは次のような意見を添えて『はしれ ディーゼル かんしや デーデ』（すとうあさえ文、鈴木まもる 絵、童心社）を推薦された。

「八月分、この本を提案させてもらいます。ぜひ読んで、ご意見聞かせてください。テキストの作者すとうさんは、ジネットの方です。私のひとつ先輩。被災

地支援のことで、特にお話したことはないのですが、面識はあります。もちろん、この本以外にご提案ありましたら、お願いします。

『三・一一の直後、東北に石油や灯油を届けるために、ディーゼル機関車が活躍したのをご存知ですか？全国から集められたディーゼル機関車たちが、新潟から福島の郡山へと走ったのです。最初に出発したのが、デーデです。途中、雪でスリップし、立ち往生してしまいます。なんとか郡山に着いたときには、予定の時刻を、三時間過ぎていました。それでも、みんな待っていてくれ、とても喜んでくれました。実話が元になった絵本です。」

三・一一東日本大震災で、東北本線、東北新幹線、東北自動車道ともに不通となり、東北への輸送が絶たれました。その時、中越地震を経験していた新潟のJR貨物の方たちを中心に、燃料を届ける取り組みが始まります。電気の通っていない磐越西線を使うため、全国からディーゼル機関車が集められます。また、燃料は横浜の根岸から新潟の貨物ターミナルに運ばれま

す。運転士さんも急遽ディーゼルを動かす研修をして、震災から二週間、三月二六日にディーゼル機関車が一〇両のタンクをひいて出発したのです。』 (<http://www.doshinsha.co.jp/search/info.php?isbn=9784494025619> 童心社のホームページより)

この提案についてYさんは

「八月分ご提案についてですが、当館にもこの本は所蔵しておりましたが、お恥ずかしながら目は通していませんでした。このご提案を受けて、読んでみるところ、正直涙が出ました。あの三・一一後の異常な燃料不足によるパニック状況を思い出しました。車のガソリンを入れるために何時間も並んだあの悪夢のような状況を……。今でも鳥肌が立つような思いです。でも、確かにあの時、リアルタイムでこの機関車が新潟から郡山に向かっているということを知っていて、「こんなときでも被災地を助けようと必死になっている人達がいるのだ」とあの混乱時にも感動したことを思い出しました。そして、本当に郡山に燃料を積んだ第一号が到着したということを知ったときは、「これ

で助かる！大丈夫だ！」と確信できました。福島の人にとつては、この話はどんな話よりも身に迫ってくるもの

ではないでしょうか。あとがきにもありましたが、縁の下の仕事を黙々とする人たちがまだ日本にはたくさんいる、日本はやはり捨てたもんじゃないと勇気の出てるお話ですね。よい本を紹介して下さってありがとうございます。」

Kさんからは「すとうさんは奇しくもジネットの方なので、この機会に連絡をとってみましたら、とても喜んで下さり、野馬追文庫にはいつも何か協力したかったので、この機会に寄贈させて頂きたいというので、ありがたくお受けいただきました。メッセージと本にサインもいただけることになりました。」といううれしいメールを頂いた。

この絵本には送り先からも

「『デーデ』の絵本は、あの震災当時の大変な状況で思い出しながら、『こうだったね』などと職員間で思い出したり、デーデの優しさ・力強さに感動しながら

ら読ませていただきました。子どもたちばかりでなく、私たちスタッフにもお気遣いいただき大変うれしく思っております。」（南相馬社協のTさん）

「デーデの絵本ありがとうございます。これ、私の！と言つて読みだしたのですが……。こんな機関車がいてくれたのですね。絵本の作者の方は、Kさんの同窓の方なのです。ありがとうございます。感謝してもう一度読ませていただきます。そしたら、職場のみんなに読んでもらいます。」（保健センターの保健師Cさん）などの感想が届いた。

Kさんも「共通本は私たちのメッセージです。で、これからも選書してお送りしたいと思えます。それぞれの場所で子どもたちを支えてくださっているスタッフの方に読んでいただくようなつもりでもいいかなと思っております。今回のデーデの本は特にそんなふうに思いました。」

ここで出てきた「共通本」だが、この言葉の背景には次のような事情がある。

丁度本を送り始めて丸三年が経過したが、今まで通

り三十六カ所の仮設住宅の集会所に本を送り続けていくことの再検討が必要ではないかという話が出ていた。そんな折に南相馬市の社会福祉協議会の担当者がRさんからTさんに代わり、以前お願いしていた子ども数のアンケートが返送されてきたが、そこに添えられた手紙には「子どもたちも狭い仮設住宅の環境になれながらも伸び伸びと生活を送れない状況です。その中で野馬追文庫の支援は大変喜ばしいことです。今までたくさんの本を支援して頂き各仮設集会所の本棚も一杯になり、今は巡回しながらおあげしています。大変申しづらい内容ですが、本の数量を減らして頂けたら有り難いです。苦勞されて支援して頂いているのに失礼をお許し下さい。」と書かれていた。KさんがTさんに電話をしたところ、現在、送られた本は仮設住宅の集会所には配本されておらず、巡回の折に差し上げているけれど、仮設住宅の方たちも余り本に関心を持っておらず、読んでいる人もほとんど見ないという状況説明があった。

そこで今後の送付方法については以下のようにする

ことになった。

まずは仮設住宅用に社会福祉協議会のTさん宛に「共通本」と幼児・小学生・中学生・高校生・大人用の本を各一冊。そして、この三年のあいだに南相馬で知り合った以下の四カ所に本を基本二冊送ることにした。この四カ所についてはこちらで選書するだけでなく、希望の本があるときにはその希望に逢うようにすることにいった。

・きつずサポート「かのん」（放課後等デイサービス）

・じゅにあサポート「かのん」（放課後等デイサービス）

・ちゅうりっぷ文庫（Gさんが主宰している家庭文庫）

・原町保健センター（保健師のOさんが勤務している）

きつずサポート・じゅにあサポートの「かのん」の「放課後等デイサービス」というのは、二〇一二年から始まった制度でそれまでは通所支援事業所が行って

いる障害児のための学童保育所のようなものだ。それまで障害児（一八歳未満）への支援は児童福祉法と障害者自立支援法という二本立てで行われてきたが、二〇一二年四月から児童福祉法に根拠規定が一本化され、障害児施設の一元化をするためにできたのが通所支援事業所で、この法改正の基本的な考え方は「身近な地域で支援が受けられるよう、どの障害にも対応できるようにするとともに、引き続き、障害特性に応じた専門的な支援が提供されるよう質の確保を図る。」と説明されている。（障害児支援の強化について―厚生労働省）

早速「かのん」からは大型絵本、ちゅうりっぷ文庫からは布の絵本、保健センターからは〇〜一歳用絵本という希望が来た。

ところでTさんが送ってくれた仮設住宅に住んでいる子どもの数だが、二〇一四年（月は不明）現在で三十カ所の仮設住宅に住んでいるのは、幼児が九〇人、小学生が一八〇人、中学生が九七人、高校生が八三人、大人が五三〇七人という結果だった。

九月に送った本は、共通本が『りんごかもしれない』（ヨシタケシンスケ著 ブロンズ新社）。

南相馬市社会福祉協議会へは「一〇月に仮設、借上げ住宅に入居されている未就学児親子交流会を開催する予定があり、その時にプレゼントしたいと思っておられます。参加者二〇組程度が集まるのではないかと予想しております。よろしくお願いいたします。」という要望に応えて、親子就学説明会用に『くんちゃんのはじめてのがっこう』（ドロシー・マリノ著、まさきりりこ訳、ペンギン社）

放課後等デイサービス「かのん」には、よみきかせ大型絵本『グリーンマンントのピーマンマン』（さくらともこ作、中村景児絵 岩崎書店）と句う絵本『ともだちカラー』（きむらゆういち作、江川智穂絵、世界文化社）

原町保健センターには『くだもの』（平山和子さく、福音館書店）と『3さいのえほん のりもの』（沢井佳子監修、講談社）の二冊。
ちゅうりっぷ文庫には、布の絵本『おおかみと7ひ

きのこやぎ』（ぐるーぷ・もこもこ制作）を送った。

一〇月は、共通本として『ちからたろう』（今江祥智文、田島征三絵、ポプラ社）。

「かのん」からはリクエストのあった大型絵本『だるまさんが』（かがくいひろし作 ブロンズ新社）

ちゅうりっぷ文庫には紙芝居の『ちからたろう』（川崎大治作、滝平二郎絵、童心社）

一月は、『どんぐりかいぎ』（こうやすすむ文、片山健絵、福音館書店）を共通本として送った。また保健センターからは先月「かのん」に送った『だるまさんが』（かがくいひろし作 ブロンズ新社）の要望があったので送った。ちゅうりっぷ文庫にはその他に赤ちゃん絵本を数冊お送りした。

一二月の共通本『サンタクロースっているんでしょか？』（ニューヨーク・サン新聞社社説、中村妙子訳、東逸子絵、偕成社）についてYさんから次のような推薦があった。

「私は初めてこの本を読んだ時に、子どもの素朴な質問に」

こんなに真剣に答えてくれる大人がいるというのは、子どもにとってどんなに幸せなことだろうと思いました。家のちびさんも最近『これ何？これ何？』を連発して、しかも同じものを何度も聞くものですか、親としては『さつきも言ったでしょ！』と言いたくありませんが、そこは我慢我慢と何度も同じ答えを繰り返していきます。こうやって、子どもたちは自分の知らない世界に興味を持ち、自分の世界を広げていくでしょうから。親として、子どもの好奇心を育てていきたいと思います。子どもの素朴な疑問にきちんと答えられる大人でありたいと思います。そして、福島の子どもたちにはやはり夢をもってもらいたい。サンタクロースという夢を持ち続けてほしいと思います。あくまで、私見ですので、他に候補がありましたら、どうかそちらを優先させてくださいね。

福島はとても寒いです。仮設にお住いのみなさん、この寒さは堪えるだろうかと心配しています。もう間もなく四年にもなるのに、こんな生活を余儀なくされ

ているのは、本当にお気の毒としか申し上げられませんが。選挙よりも被災者支援なのでは？と最近の情勢を見るにつけ世の矛盾を感じます。せめて、子どもたちには本というともしびで心だけはあたたためてほしいですね。」

「かのん」のNさんからは「職員からは、クリスマスのふしぎなはこ（長谷川 撰子作、斉藤俊行絵、福音館書店）や一〇〇にんのサンタクロース（谷口智則作、文溪堂）などがリクエストされました。」とのことで二冊の絵本と「ぐるーぷ・もこもこ」制作のクリスマスツリーとオーナメントを併せて送った。

また、原町保健センターには、大型絵本『きんぎよがにげた』（五味太郎作、福音館書店）を送った。

ちゅうりっぷ文庫には今まで長い間本を送り続けて下さった高知こどもの図書館から寄贈して頂いた最後の寄贈本約三〇冊を送り、児童館にも分配して頂くこととした。その本はGさんが市内三ヶ所の児童クラブに配本して下さった。

「東京漢点字羽化の会」第127～129回

例会報告とわたくしごと

木村多恵子

2016年7月の例会（第127回）7月13日（水）

13…30～15…30、場所、港区ヒューマンプラザ

7階竹芝小ホール

9月の例会に、横浜羽化のYさんが、お出でになると、岡田さんからお話があった。

朝日の歴史学のグループ分けを決めていただいた。

7月20日の横浜での印刷を、今回もIさんとSさんが行ってくださることになった。何時もありがとうございます。

学習会のサポートをしてくださる方の確認をした。

8、9、10月の日程を決めた。

6月の例会のときの自由討議の内容を引き続いて岡田さんがEIBRWの使い方、仮名点字と漢点字の違いについて説明した。

2016年8月の例会（第128回）8月10日（水）

13…30～15…30、ヒューマンプラザ

7階第2会議室

「機関誌羽化」の読者である坂口喜代様から五千元ご寄付をいただいた。坂口様ありがとうございます。大切にに使わせていただきます。

会員のAさんが、また羽化発送用に沢山切手をご寄付くださった。

8月13日の学習会のサポートをしてくださる方の確認をした。

『朝日「歴史学」』の入力グループを決めた。

9月21日の印刷はSさんとIさんが行ってください。何時もありがとうございます。

いつものように、基本的な記号類、その他入力方法について質問を受け、今回も岡田さんが丁寧に説明をした。

2016年9月の例会（第129回）9月7日（水）

13…30～15…30、ヒューマンプラザ7階

竹芝小ホール

横浜からYさんがお見えになり、『萬葉集釋注』第

6巻の校正について説明してくださった。この巻が終
わるともう全体の半分を過ぎることになる。皆様あり
がとうございます。そしてまたよろしくお願いいたし
ます。

何時ものように朝日の記事入力グループ分けを決
めた。

9月21日の横浜での印刷には、IさんとSさんが行
ってくださいと申し出てくださり、このことも安心で
きた。

I様、S様、何時もありがとうございます。

『古語辞典』の進捗状況を確認した。

今回も入力に必要な記号類について説明を受けた。

* 予告

2016年10月の例会(第130回) 10月12日(水)

13・30と15・30、ヒューマンプラザ7階

竹芝小ホール

2016年10月の学習会(第102回) 10月23日(土)

17・30と19・30、場所ヒューマンプラザ7階

第2会議室

2016年11月の例会(第131回) 11月9日(水)

13・30と15・30 ヒューマンプラザ7階

竹芝小ホール

2016年11月の学習会(第103回) 11月19日(土)

17・30と19・30 ヒューマンプラザ7階

第2会議室

2016年12月の例会(第132回) 12月7日(水)

13・30と15・30 ヒューマンプラザ7階

竹芝小ホール

2016年12月の学習会(第104回) 12月17日(土)

17・30と19・30 ヒューマンプラザ7階

第2会議室

わたくしと

あるとき、いつも行くところで、ミニバザーをやっ
ていた。

なにかいいものはないかな?衣類は避けて、乾物類
や手作りのお惣菜やお菓子を採し始めた。

「蜂蜜はいかがですか？ 1キロ入りで多いかもしれません、とても美味しいのでお勧めします」と上手な売り込み。

「うーん、1キロは多いな」とうなりながらも蜂蜜の入れ物を見せていただいたら、思いがけず瓶ではなく、ビニール袋に注ぎ口が付いているだけの単純なものだった。

「これならこぼさずに移し取れるかな？」と気持ちが高動いた。が、わたしが思っているよりはお値段が高いので、もしあまり気に入らない味だったらどうしよう、とまた躊躇した。けれどもめったにないチャンスなので、エイヤア、と買うことに決めた。

家には丁度プレーンのヨーグルトがあったので、まずそれに蜂蜜を少し入れて食べてみた。

「あれ？」
喉にひっかかる渋味が無く美味しい。

蜂蜜を増やした。美味しい。もっと入れた。「うーんおいしい！」

最後は蜂蜜にヨーグルトを入れたような具合になっても喉ごしが柔らかくて美味しい。

今度は、新しい大根があったので、直ぐ大根をスライスして蜜をたっぷり入れた。すると大根からどんどん水分が上がってきた。小さな杯にその汁を入れて飲んで見たら、これも優しい甘味で美味しい。

蜜にたっぷり浸かった大根も食べた。

大根はしゃきつとして実に美味しい。

蜜に浸し続けると大根の繊維が堅くなってしまいうので、ほどほどの分量に留（とど）めて、大根は必要な時にマメに切ることにした。

若い頃わたしはしょっちゅう咳が出て苦しかった。

止めようとすればするほど、咳が咳を呼ぶ。わたし自身はある程度まで咳をしてしまった方が、無理に押さえ込むより楽だったので、自然体でいたかったが、側にいる人は聞いていられない。最初は心配しているも、だんだん困り果て、やがてにがにがしく呆れているのが分かって、こちらも惨めであった。

もちろん一人その場を離れることもあるのだが、電車の中や、一緒に歩いてどこかへ連れて行ってもらうときは一人になれなくてわたしも困った。

なんとかしようとは思いますが医者にかかるのは好きではない。とは言っても仕方なく病院へ行つて薬を処方してもらったが思うようには効かない。勝手に咳止めの売薬を買うのはもっと怖かった。

そんなときラジオで、

「生大根を一センチ角に切つてそれを広口瓶の半分くらいまで入れて、大根がひたひたになるまで蜂蜜を入れておくと、次の日には水があがってくるので、その汁だけを飲むと、しつこい咳は収まります」と話していた。瓶の蓋はせずに綺麗な布巾をかけておくように、とまで注意してくださった。

早速大根と蜂蜜を買つて来て大根きざみをし、蜂蜜を入れて布巾をかけておいた。

なるほど、夕方作った蜂蜜大根は翌朝にはたっぷり

水分があがって、見た目には出来上がっていた。

早速その汁をカップに入れて飲んだ。

いやいや辛いのが辛い、辛口の大根おろしの汁を飲んだようなものだ。

咳止めにいいと言われてもこれは辛すぎる。第一喉に渋味と辛味が引つかかって、かえつて咳き込んでしまった。

慌ててたっぷり真水でうすめたが、いったん辛い思いをしてしまったからか、喉がひりひり痛い。

刻んだ大根は水分を失って小さく固まっていた。教えてくださった人も「大根は捨てるか、まあ食べてもかまわない」と言っていたが、やはりそのまま食べる気にはなれなかった。

こんなに辛いのは、大根の量に比べて蜜が足りなかったのか、蜜そのものに混ざりものが多い純度の低いものだったのか、花の種類がいろいろ混ざっているからなのか、わたしには理由が分からない。

蜂蜜を買うとき、詳しく花の種類や純度など尋ねず、ただ「これが蜂蜜です」と言われただけで買った

のだが、それでも当時のわたしには高いと思ったことを覚えている。

今考えてみればやはり大根の量に対して、蜜は少なかつたのだ。おまけにその蜜の純度が低かつたのだと思う。

とにかく第一回はこのように大失敗だった。

その後大根の量を減らし、蜜を増やし、漬け込んだ大根を早めに引き上げたりして、何度も挑戦したがどうしても蜜の渋味が喉にひっかかって不満だった。

それが今回はこれまでとはまったく違っていた。

「やつと見つかった！」

わたしは小さく叫んだ。

さて、この蜂蜜はどのもの？

そうだ、これを提供して下さった方に聞けばいいのだ。

そして迷わずその方に電話をし、「とても美味しい蜂蜜を提供して下さってありがとうございます。」

これは何処で買いになったのですか？」と言うと、

彼女は「あれを木村さんが買ってくださいだったのでか？喜んでいただけでわたしもうれしいです。あの蜂蜜はいただいたものなのですが、くださった方には、事情があつて詳しいことをお聞きできないのです。」

「こんなおいしいものは初めてなのです。これまで探していたのに、いつも渋味があつて、喉に引っかかつて満足できなかったのです。でもこれは優しい甘さなので気に入ったのです」とお礼も兼ねて言った。

「何の花か見るのを忘れたけれど、〇〇養蜂だから探せば分かると思います。」と言った。

結局ガイドヘルパーの方に蜂蜜の袋を見ていただいで、「純正アカシア、ルーマニア産」と詳しいことが分かった。

わたし自身、とても驚いているのだが、多すぎると思った1キログラムは、あれよあれよという間に袋は空っぽになつてしまった。

素敵に贅沢な買い物だった。

2016年9月21日（水）

漢文のペーシ

暮くれに立たつ 白樂天はくらくてん

黄昏くわん 独り立つ 仏堂ぶつどう 前まへ

満地まんぢ 槐花かいが 満樹まんじゆ 蟬せみ

大抵たいぢ 四時しじ 心こころ 總すべて苦くしむ

就中じゅうぢゅう 腸ちやうの断たるは 是これれ秋天あき 天てん

黄昏くわん 独り立つ 仏堂ぶつどうのまへ

満地まんぢのまへ 槐花かいが 満樹まんじゆのまへ 蟬せみ

大抵たいぢ 四時しじ 心こころ 總すべて苦くしむ

就中じゅうぢゅう 腸ちやうの断たるは 是これれ秋天あき 天てん

夕暮れ時、独り仏堂の前に立つ。

槐えんじゆの花が一面に散りしき、どの木に

も秋のセミが鳴いている。

一年中たいてい心に苦しみを抱えているが、中

でも秋はとくに辛い思いがする。

四時しじ 春夏秋冬いつでも。一年中。

就中じゅうぢゅう 中ちゅうに就きてしゅう（その中でも）。

村夜そんや 白樂天はくらくてん

霜草そうそう 蒼々そうそう 虫切々むし

村南村北行人絶むらみなんそんぼくこうじんたゆ

独り出でる門前かどまへ 望のぞむ野田のの

月明げつめい 蕎麦花そばがは 如ごとし雪ゆき

霜草そうそう 蒼々そうそう 虫切々むし

村南村北むらみなんそんぼく 行人絶こうじんたゆ

独り門前に出でて 野田を望めば

ひとりもんぜんにいでて やでんをのぞめば

月明らかにして 蕎麦花 雪の如し

つきあきらかにして きょうばく はな ゆきのごとし

切々せつせつ 連続すること。虫の音の擬音に

行人こうじん 旅人の意味もあるが、ここでは

蕎麦きょうばく 小麦ソバ。白い小花が一斉に開く。

（参照図書）

渡辺精一『朗読してみた』中国古典の名文（祥伝社新書）



暮トクに立タツつ 白シロ樂ラク天テン

黄ワウ昏コン独ドクリ立タツツ 仏ブツ堂ドウノ前ゼン

満マン地チノ槐ケイ花カ満マン樹ジュノ蟬セン

大ダイ抵テイ四シ時ジ心シン總ソウテ 苦クシム

就ジュ中チュウ腸チュウノ断タンタルルハ 是コトレ 秋アキ天テン

村ムラ夜ヤ 白シロ樂ラク天テン

霜シラ草クサ蒼ソウ々々虫ムシ切キ々々

村ムラ南ナン村ムラ北キョク行人コウジン絶ツツユ

独ドクリ出デテ 門カド前ゼンニ 望ノゾミメ

巴ハ野ノ田タヲ

月ツキ明アカラカニシテ 蕎ソバ麦アヲ花ハナ如ニシテシ 雪ユキノ



白樂天 (772~846年)

中唐の詩人。字は樂天、名は居易。
「長恨歌」や「琵琶行」は広く知られ、愛好されている。常にわかりやすい詩作を心がけ、社会風刺的な詩も多い。平安時代以降の日本文学に大きな影響を与えた。

*「暮に立つ」は、《白樂天が四十歳のときに母親を亡くし、その喪中に作られた詩。地面に広がった落花と、盛んに鳴くセミの対比が、世代の交替と無常を思わせる。今、鳴いているセミもほどなく消えてゆくからだ。》 「村夜」も、《一方で霜枯れを思わせながら、虫は盛んに鳴いている。白樂天は、生命を失う方向にあるものと、今を盛りとエネルギーを放つものを並べる技法の使い手である。》

『朗読してみたい 中国古典の名文』〔読みどころ〕より

「報告と」案内

一 『萬葉集釋注』第五卷

本会が漢点字に関わる活動を始めて二十一年目に入っておりますが、当初から立てておりました活動の柱の一つに、「視覚障害者が学習し、鑑賞するのに欠かせない資料の製作」というものがあります。

まず漢字の辞書はどうしても必要であるところから、横浜国立大学の村田忠禧先生のご協力と学習研究社様のご理解によって、電子版のテキスト・データを頂戴して、『漢字源』（藤堂明保編）の漢点字版、全九〇巻を完成させて、横浜市中心図書館に納入させていただきました。これには、当時横浜市議会議員であられました大滝正雄先生のご尽力によるところが極めて大きなものがありました。感謝申し上げますが足りません。

この作業は、木下さんのご指導の下、会員を挙げて手作業で行われました。これによって、点字書の製作作業、紙折り・糊付け・表紙付け等の工程が確立され

ました。

この後一年に十冊前後の規模の漢点字書を製作して、図書館に納入しております。

その後どのような書籍を漢点字訳するか思考して参りましたが、やはり辞書と古典という、基本的な資料なしでは、本会の活動の目的は果たせないと考え、二〇〇三年から、『常用字解』とそれに続く『人名字解』（白川静著、平凡社）の完成に漕ぎ着けました。

『漢字源』の完成は、点字書の製作工程の確立に大きな意義を残しましたし、視覚障害者にとって、それまで閉ざされていた〈漢字〉への理解を、〈漢点字〉を通して開いてくれました。そして『常用字解』、『人名字解』の完成は、漢点字使用者の漢字の理解を、より深める道標となりました。

二〇一二年から、『萬葉集釋注』（伊藤博著、集英社文庫）の漢点字版の製作に着手し、図書館に納入しております。『漢字源』、『常用字解』、『人名字解』という辞書の次に必要な資料と言えば、やはり古典です。その中でも古典中の古典である「万葉集」

を、視覚障害者が読むということ、考えて見ればこのようなことは、驚天動地だったのではなかったか、今思えば、そのように思えて参ります。しかし昨年（二〇一五年）度には、第四巻まで完成することができました。毎年出来上がりますこれらの漢点字書を真っ先に読むことができ、その都度驚き、喜び、感謝しております。

本年度は、第五巻（巻第九、巻第十）の完成を目指して、鋭意努力しております。ご支援のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

二 『岩波古語辞典』

東京漢点字羽化の会では、『岩波古語辞典』（大野晋・他編、岩波書店）の漢点字訳を進めておりますが、この程、サの項まで完成致しました。全体のほぼ三分の一ほど、漢点字で読めるようになったと言えます。

入力・校正の最前線は、既に半ばを越えております。現在取り組んでおります「万葉集」を読むに当たっても、今後のニーズとして必ず想定できるその他の

古典を読むに当たっても、この漢点字版の『古語辞典』は、大きな力となってくれるものと思われます。ご期待下さい。

三 音訳版『常用字解』

漢点字版に引き続き、音訳版の『常用字解』が、急ピッチに進んでおります。現在ア行がほぼ完成し、DAISYのレベル分けも、その方法が定着しました。

『常用字解』は、一種の文芸作品と見るのが正しい見方かと思われますが、その体裁は、漢和辞典の形式を取っております。従って、引きたい文字の検索が容易にできなければ、製作の意義を全うすることができません。しかし本書は、漢字の並びが、漢字音がその五十音順で並んでおりますので、DAISYのレベルを、その五十音に当てることで、検索を容易にすることができました。漢字の知識をお持ちの中途失明の皆様には、喜んでいただけるものと信じております。

音訳者の有志がプロジェクトを組んで、取り組んでおります。ご期待下さい。

編集後記

▼本会が活動を開始してから満20年たち、『萬葉集釋注』の製作を始めてからも

4年が過ぎて、5年目に入っています。これは10年計画ですが、既にその半ばに達したことになります。横浜市中央図書館にはこうして納入された漢点字図書が大きな書棚にぎっしりと並べられています▼通常ではなかなかじっくり読む機会のない万葉集を、漢点字変換用に編集し、点字用紙に打ち出して製本すると、大変な作業ではありますが、それなりに意義のある仕事をしているという実感がわきます。その内容については岡田さんが詳しく書いておられますが、日本語を何とかして外来文字である漢字を使って書き表そうとする努力の集大成が万葉集なのだ考えると、われわれの仕事に大きな意味づけがなされたような気がします。

木下 和久



図書館の書架に並んだ漢点字書

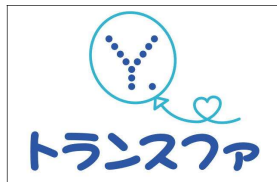
(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。

研修者募集：弊社では、ガイドヘルパー（視覚障害者）の資格取得研修を実施致します。詳細はホームページで。



URL: www.ytrans.net

〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は1月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。